

道義の根底

人間衷心の願ひ

大地の現実を見つめる。そこには絶えざる闘いがくり返される。

人間は果して戦いを好むのか。それとも平和を好み、相愛を欲するのか。道義の子であるのか、野獣の一種であるのか。

今、現に戦いがつづけられているということは、決して、人間が争闘を好むということの理由にはならない。誰だつて人間は平和を好むのだ。平和な世界、自由な世界がほしいのだ。

道義の根幹

「一切衆生は世々生々の父母兄弟なり。」

「一切の男は皆我が父であり、一切の女は皆我が母である。」

それは法愛の前に開かれたる釈尊の根本的信条の一つであり、仏教徒の生活の根本を規定する世界である。思いをひそめて、この一切衆生は皆、世々生々の父母兄弟であるとの叫びを味わうべきである。

一切衆生は皆父母兄弟であるとの信条が、我らは如何に生きねばならぬかを教える。それこそ我らの道義の根幹をなすものでなければならぬ。

人間は争いたいのではないのだ。愛と平和と自由とを好むものなのだ。

同朋愛

「親鸞は弟子一人ももたずさぶらふ。」

これは親鸞の自覚における内的宣言の一つであつた。

常陸国新堤の信楽房が師匠親鸞聖人と、法文上の義理について全く仰せを用いなかつたために、師弟の縁が切れて、本国へ下向することになった。

その時、御弟子の蓮位房が

「信楽房が御門弟の儀をはなれて本国へ下向なされるについては、預け渡さるるところの本尊・聖教を召し返されないで御座いますか……お聖教の中には釈親鸞と御認めなされたお聖教も多いことで御座います。御門下を離れたてまつる上は、仰崇の心も御座いますまい。」と申し上げた。聖人は仰せられた。

「本尊・聖教を取り返すこと甚だ然るべからざることなり。その故は親鸞は弟子ももたず、何事を教えて弟子といふべきぞや、みな如来の御弟子なれば皆共に同行なり。」
何という徹底した言葉であろう。

「念仏往生の大信心は、如来の方便によりて発起したるもの。全く親鸞が授けたるものではない。」

一切の衆生は如来の前に結ばれたる兄弟である。

人師階級として、一部の人たちを、敵として見、あるいは無智と見、その上に君臨する高慢者は聖人にはいらなかったのだ。いやそれにはなれなかったのだ。

心と心が、しつかりと結ばれて大地の上に、如来を親とし、真理を師として生きてゆく、なつかしくも尊き同朋愛の広野が開かれるのであった。

「親鸞は弟子一人ももたず

何事を教えて弟子といふべきぞや

みな如来の御弟子なれば共に同行なり。」

何という強い宣言だ。広大な世界だ。この世界を広大会といい、大会衆門というのだ。これが聖人の師道の根底であつたのだ。

それはちようど、聖人の孝道觀の中心が、「そのゆえは、一切の有情は、みなもて、世々生々の父母兄弟なり。」その法愛の前に開かれたる衆生觀が、孝道の中心であつたように、

「本尊・聖教は、衆生利益の方便なれば、親鸞と縁がきれて、他の人の門に入るといふとも、私に専有すべきものではない。如来の教法は総じて流通物だからである。しかるに、もし、親鸞の名字の書かれたお聖教を、坊主憎ければ袈裟まで憎いの心から、たとえかのお聖教を山野に棄てるとも、その処の有情群類がお聖教に救われて、その益を得るであらう。しかれば衆生救済の本願は満足されるのである。」

まかせきつた心持、徹底したる同朋愛の切味、

師にそむきて逃げてゆく人の上にすら感ずる同朋愛、

真理を私有・専有・我がもの顔にしない無我純真、

師弟道は、一切同朋と真理の前に脆くことにあるのだ。

そうだ、真実教育の根底は、一切人を兄弟と見る世界に立つて、真理の前に合掌する世界にのみ可能なのだ。

鬭争・煽動、そんな言葉の肯定される教育が真に人類を幸福に導き得るのであろうか。一つの横暴に替えるに一つの横暴をもつてする、永久なる争い以外に何があるか。

汝の生活の指導原理を、一切群生の笑い得る世界、争わざる世界、個性の自由に解放されたる世界に発見せよ。

仏教の彼岸とは実にこの一切が真如常恒の光に輝ける世界であつて、我らの眞実生活の本質的力となるべき世界である。

この眞実に根ざさない限り、一切の理論も運動もことごとく皆「そらごとたわごと」である。

積尊に反逆し、積尊を苦しめ、積尊の教団を破壊せんとし、さてはその生命すら奪おうとした者は提婆であつた。

積尊はある時は提婆が無間地獄に墮在すべきことを説いたにかかわらず、ついに「提婆は我がよき善知識である。」と叫ばれた。

キリストは、彼を無謀にも死刑にせんとし神に反逆せる民衆を、十字架を背負いつつ決して怒らなかつた。そして言つた。

「神様、彼らを許してやって下さい。彼らは何をなすべきかを知らないからであります。」

その愛、その慈悲、一切人の上に感ずる温切なる同朋愛、そこに何の対立があるか。世の智者たち、よろしくこの人類平等の大慈悲の上に立てる教育法を用うべし。誤れる教育が、人類史上にいかなる害毒を流すか。

おゝ道義!

道義の根底は実にこの一切衆生悉く兄弟であるとの自覚に立つべきではないか。

全否定

愛に根ざさない限り、人は他人を束縛し、弾圧し、独裁し、殺害する。

自由・解放は決して、そうしたことを肯定する感情の中から生れない。

戦いのある所には常に、二組の対立を要する。二つの対立の間にのみ戦いがある。その一方を肯定し一方を否定する態度、それは唯、異った戦いをくり返さずに過ぎないのだ。半肯定・半否定の思想、永遠の闘争なれば、我らは何を苦しんでそれに参加する必要がある。

道義的愛によらざる、一切の対立を否定せよ。

全否定! 仏教の中心思想は、この全否定によつて生れる道にあるのだ。

人類よ! この全否定の世界にかえれ。

大なる否定から大なる肯定が生れる。全否定のただ中から、それに即する大肯定が生れる。

3

兄弟なのだ

あなたは私を敵として見るのか。なぜあなたは私に刃を向けて、そうまでも戦いをいどむのか。

あなたはなぜ、私を嫉妬するのか。あなたはなぜ、私が地上に存在することを、あなたの不幸と見るのか。

汝はかつて、汝に仇をする者を汝の敵と見ようとした。

汝が誠意をつくしても相手が動いてくれない時、汝は無智なる者よと言おうとした。

裏切られくくって苦しむ心、裏切つてくく苦しめる心、それが真の生活態度であったか。

敵であるのか。果して彼らは敵であるのか。情なくもなる。腹も立ちもする。しかし考えたがいい。裏切つてゆく人が、刃をふりむけて来る人が、果して仇であるのか。

兄弟なのだ! そうだ兄弟なのだ!

たとえ、彼が汝の生命を奪つたにしても彼は汝の同朋なのだ。彼の兄弟たちのために、十字架を負わされたのが、過去の聖者たちではなかったか。

汝はかつて、戦うことを、腹だつることを、他をしのぎ他に勝ることを、そしてピラミッドの頂上に立つことを成功者のほこりと感ずる社会の教育を受けて来た。しかしそれは大きな誤りであった。

真の教育は、一切人類の地平線上に下りて、そこに合掌して立つ人を作ることだつたのだ。

汝の一切の兄弟たちが汝を苦しめるかも知れない。

刃を向けたつて、彼は決して汝の敵ではないのだ。

兄弟を棄ててはならないのだ。

去りゆく弟子の上にも、同朋愛を感じた人もあつたのだ。

どちらにも

あなたとあなたはなぜにそうまで呪ひつゞけるのか。私はそれを見ると心が痛む。理由はどちらにもあろう。私はそれを問うのではない。なぜもつと根本的な道義に立つて、汝自身を再検討しないのか。内省しないのか。

二人の兄弟があつた。彼らは財産のことについて白洲に訴えて出た。賢き判官は彼らをもつ一つの室に入れた。両側の隅に背を向けあつて二人は黙つて坐つた。一時・二時、待つ間の寒さはひしひしと身にしみた。部屋の中には一つの火鉢がある。二人は黙つたまま火鉢に近寄つた。

黙つたまま考えた。そうして幼き日の追憶にかえつて行つた。母の膝にたわむれた日の記憶、共に山に小川に遊んだ無邪気な日の思い出、二人の間には、幼き日の魂の流れが復活した。彼らは一口話し、二口話し、ついに訴えを取り下げて帰つて行つた。

心霊の故郷に帰れ！

一切人は兄弟なのだ。

あなたとあなたは戦つている。呪うている。しかしそれは決して二人のほんとうの性ではないのだ。愛しあいたい。平和でありたいのだ。

それなのに、あなたたち二人の内、どちらも私を味方にして、その戦いに勝とうとする。私を引き入れて、呪いの凱歌をあげようとする。私はあなたにも味方出来ないし、あなたにも加勢は出来ないのだ。

呪いつゞけて戦おうとする。あなたの味方には決してなれないのだ。たとえ、冷淡だ、無慈悲だ、無智だと罵つても、果てはあなたが私にまで呪いの刃を向けようとも、私は決してあなたの味方は出来ないのだ。

法然上人という方の父上は、怨ある人のために殺された。その死の枕辺に幼き法然を呼んで、世の親のように、遺品の刀を渡して「親の仇を討つてくれ」とは言わなかつた。

「二つの怨に、怨をもつて行つては、怨を仇に、仇を怨に、何時までたつてもやむことはない。自他共に亡ぶのだ。汝は決して親の仇を討つのではない。どうか出家して、汝自身も助かり、多くの人も助かる道を求めてくれ。」

それがその遺言であつた。

法然上人こそ日本浄土門の元祖である。彼自ら救われると共に、それから七百年、彼の体験した生命の流れに、幾千万の心霊が救われたことであろう。

人類の解放

如何に幾千巻の組織だった学問がその背景にあらうと、戦いの哲学に、何で人生永遠の帰結、平和と自由との解放があらうぞ。

道義の根本、一切人類悉皆同胞の大愛の根底に立つなれば、それがいかなる運動であらうと、それを肯定し讚美する。

道義を離れて人間生活はあり得ない。人類の解放とは人類の道義的解放である。

尊重

一切衆生悉皆同朋の主張は、それが温かき同朋愛に根ざすと共に、それは一切人を平等に尊重すべきことを教える。

見苦しい傲慢と、寂しいほこりの世界には、なつかしいのちの内的接触はあり得ない。

あなたも亦このいのちに参加するのだ。あなたにもそうした願求があるのだ。幼き者にも、老いたる者にも、一切の差別相をこえて、この力が輝き、この流れが潜在する。これ釈尊が「一切衆生悉有仏性」と叫ばれた所以であり、釈尊の生命の広野に見出された尊重すべき衆生の発見であつたのだ。

高慢なる世界からは、一切は無智で、無価値であるかも知れない。しかしそれは決して正しい見方ではない。

愛と道義の輝く世界、そこには決して無価値なる者は存在しないのだ。尊きいのちには、はぐくまれる御同朋であり、御同行である。